



～進路選択に迷っている普通の関高生に～

◇ 今回は、石原宏樹さん（立命館大学卒業）の熱いメッセージです！

1. はじめに ～進路選択に迷っている普通の関高生に～

関高校在学中、生徒会活動をしていたわけでもなく、部活動に入っていたわけでもなく、進学先も関高校生としては突出しているわけでもなく、これという目標を持って勉学に励んでいたわけでもない。そんな私のような者が「活躍する卒業生」としてこうした機会をいただけることはありがたいこともあり、同時におこがましいような気もしております。ですが、これからかつての私のような、いわゆる普通の関高校生が、卒業後に何を見て、何を感じて、成長してきたのかをお話しさせていただきますので、何か進路を迷っている方の参考になればと思います。

2. 大学での学び ～エネルギーからまちづくりへ～

高校三年生の時、私は立命館大学の産業社会学部に進学予定でした。実家から通える某国公立大学国際系学部の合格ももらっていましたが、様々なトピックを学ぶことができそうな産業社会学部を選択しました。そんな矢先の2011年3月11日、東日本大震災が起きました。津波によって多くの命が奪われただけでなく、福島原発の放射能で多くの人々が帰る場所を失いました。私は「震災を目にした自分に何ができるのか？」という、その当時誰もが直面した問いにぶつかることとなりました。私はこの問いに対して「これから大学に入学する自分は学ぶことが本分だ。脱原発をテーマに研究しよう」と決意しました。

大学二回生になった折、私は福島原発事故を契機に小水力発電の可能性に着目し、岐阜県大垣市上石津町時地区に現存する小水力発電プラントを再稼働させることを目的に活動している立命館大学の企画研究団体「時は今だプロジェクト」に参加しました。そしてこのプロジェクトがきっかけで同地区に関わることとなりました。現存する小水力発電所と比べても大規模といえる時発電所を今から約100年前に村営で設立する時地区の自治力と、当時の電力事情の見越した先見性に、私は目を見張りました。同時に、「このプラントを再稼働できたとしたら、原発に依存してきた日本のエネルギー政策に一石を投じることができるかもしれない」と希望を抱きました。しかしながら、当時の私はその想いを優先するあまり、住民の方々の意見やお話を真剣に受け止めていなかったと思い返します。二回生の終わりにイギリスへ留学するまでの私は極端にエネルギー政策や技術のことばかりを考え、まちの人たちとの交流さえも面倒に思うほど生意気な学生でした。そんな私に起こった変化があります。それがロンドン留学を通して出会った異国の仲間たちと彼らの語る「場所の物語」と出会ったことです。

私の通っていた学校には英語を母語としないヨーロッパからの留学生が多く、学校の長期休みを使って彼らの生まれ故郷に遊びに行く機会が多くありました。私の心の底に焼き付い

ている旅行の思い出は、その国やまちの観光名所だけでなく、一見何でもない普通の場所にも残っています。何の変哲もない場所や風景に対して、友人が具体的な思い出や物語を語ってくれることによって、私までもその場所が好きになってしまうことがあるのです。その時、友人の故郷への愛着を自分も共有できたような気がしました。同時に、「自分は『時は今だプロジェクト』の活動において、住民の方々が持つ地域への愛着に共感しながら活動していたか？」と自問せざるをえませんでした。場所にはその地域に住む人々が紡いだかけがえのない物語があります。その物語に敬意を払ってこそはじめて「地域の人と共に考える」ということができるのではないかと深く反省しました。

帰国後、私はプロジェクトの担当教授、NPO 団体に所属する方、そして地域のまちづくり協議会の方々と共に全 4 回にわたる地域の未来を考えるワークショップに参加することになりました。これから先 10 年後の地域をどんな場所にしたいかを話し合う大切なワークショップです。そこで私はまちの人々の地域への愛着や葛藤を目の当たりにしました。そしてその尊い話し合いの成果を研究ノートとして社会人となった現在でも執筆しています。

3. 進路選択 ～若い世代の地方を志向する潮流～

私は現在岐阜市役所で公務員として働いています。多くの人から「せっかく英語が喋れるのにどうして岐阜に戻ったの？」とよく聞かれます。その理由は福島原発事故から得た気づきが原点となっていることは確かですが、正直自分の言葉でうまく言い表すことができません。だから人の言葉を借ります（笑）

神戸女学院大学名誉教授である内田樹さんは、「ローカリズム宣言」において地方を志向する若者に対して次のような分析をされています。

「今僕たちは爛熟した後期資本主義にいます。経済システムは想像を絶するほど複雑になり、いったい何のためにこれらのシステムが作動していて、いま何をしているのかも僕たちには全然わからなくなってしまった。（中略）ところがこの経済システムに「顔」を見た人たちが出て来た。19世紀イギリスのラッドライトたちと同じように、科学技術や金融工学の自然な発展過程、個人の善意も悪意も関与する余地のない自然過程と思われたこの経済システムが「禍々しい顔」をしていることに気づいた人たちが出て来た。人間をただ疲弊させるためだけに働かせ、その労働の果実を収奪し、心と体を傷つけ、ついには殺す「邪悪な本性」を見たと信じる人たちが、このシステムが吐き出す「瘴気」が届かない場所に逃れ始めた。」

私は現在の政治経済システムが福島原発事故を取り扱っていく過程で、この「禍々しい顔」の片鱗を見た気がしました。そしてまちづくり活動を通して出会う地方移住者の方々とお話しすると、その恐ろしい一面に対する思いを直感的に共有することが多くあります。（これから進路選択をしていくみなさんに語るのはあまりに残酷なことです）大学を卒業し、都市部の大企業に勤めることを選択した同級生や先輩の一部で、このシステムに巻き込まれて疲弊しきっている人も少なからずいます。そんな現状に対して異なった生き方を模索する動きがJ、U、I ターンだと私も考えています。私自身Jターン者ですし、これに対して共感す

るのはもちろんです。そしてそんな動きに行政としても、一市民としても深く関わっていき
たい、サポートしていきたいと感じたからこそ、私は今の仕事を選んだのだと思います。

4. 終わりに ～応答し続けること～

「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれ
われから期待しているかが問題なのである。(中略) 人生はわれわれに毎日毎時間を提出し、われわれはその問いに、詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければ
ならないのである。」

フランクルの「夜と霧」という書物からの引用です。著者である精神科医のフランクルが
アウシュビッツ強制収容所で体験したことが記されており、東日本大震災以降急激に売り上
げを伸ばしました本でもあります。高校生の私には、何のことだかさっぱりわかりませんで
した。しかしあの震災の意味を探し求める人々の心を引きつけた書物であることは間違いあ
りません。さて、先ほどの文章における「正しい行為」は英語版では責任、Responsibility
と表現されることもあります。少し言葉遊びをさせてください。Responsibility は2つの
単語に分けられます。想像の通り Response (応答する) と Ability (能力) です。責任とは
つまり応答する力のことと言えます。

私は東日本大震災からの問いかけに自分なりに責任を持って答え続け、再エネ、留学、ま
ちづくりなどたくさんの寄り道をして今に至りました。(ここには書いていませんがインタ
ーンやボランティアに参加したりもしていました。) もし関高校生で進路に迷っているみな
さんに一言偉そうにアドバイスをさせていただけるとしたら、とにかく自分に降りかかって
くる「問いかけ」に真剣に「応答して」みてほしいということです。ニュースでも良い、友
達の話でも良い、何かを真剣に考えて答えを出してみてください。たとえその答えを他人か
ら笑われても、かっこ悪い思いをしても良いです。時には間違えることもあるでしょう。しか
し、幸運にも私たち人間はそ
うした経験の中にも何らか
の意味を見出し続けること
ができます。そうして掴み取
ったあなただけの「答え」は
間違いなく人生の情熱を注
ぐに相応しいものとなっ
ていると思います。



留学先の盟友ステファンと彼の幼馴染たち。



ロンドンのクラスメイト。唯一のアジア人でした。



大垣市上石津町時（とき）地区のワークショップにて。

<引用文献>

内田樹著 ローカリズム宣言-「成長」から「定常」へ- 2017 デコ
ヴィクトールEフランクル著 霜山徳爾訳 「夜と霧」 1956 みすず書房